

今 外三郎（こん・そとさぶろう）

1、プロフィール

1865 慶応元

9月、弘前藩士、今貞衡の4男として弘前に生まれる。次兄に武次郎

1860s 明治初年

一家で札幌に移住。父貞衡が北海道開拓使に転勤したため。

1876 明治9 11 歳

1月、札幌学校予科に入学。（この年の8月札幌学校は札幌農学校と改称された）

1881 明治 14 16 歳

9月、札幌農学校本科に入学。

1885 明治 18 20 歳

7月、札幌農学校卒業、農学士。

1886 明治 19 21 歳

松本の長野県尋常中学校に赴任。

1887 明治 20 22 歳

長野県尋常師範学校に赴任。著書『学海之針路』、訳書『農場整備論』（ヂェシー・モルトン他著）『電気現象及理論』（ジョン・チンダル著）

1888 明治 21 23 歳

東京英語学校に赴任。

4月、志賀重昂、三宅雪嶺らと政教社を設立し雑誌「日本人」を創刊。

1889 明治 22 24 歳

2月、陸羯南の新聞「日本」創刊時、会計部長を務める。

1891 明治 24 26 歳

1月、「国会」新聞に社友として執筆。

5月、「東京朝日新聞」に論説記者として入社。

1892 明治 25

3月、大磯で結核のため死去。26 歳。

本駒込の吉祥寺で葬儀、法名「恭心院義行夢ト居士」。

2、作家解説

今外三郎は、慶応元(1865)年9月弘前に生まれた。父貞衡は弘前藩士、祖父は勘定奉行を務めていたという。外三郎は四男だが、次男には武次郎がいた。この兄についてはあとで触れる。父が明治初年、明治2年創設の北海道開拓使に転勤になった関係で、一家で札幌に引っ越している。外三郎は北海道で成長し、明治9年1月に10歳で札幌学校(8月に札幌農学校と改称)予科に入学した。そして明治14年9月、札幌農学校予科から本科に入学する。そこでは明治11年から15年まで札幌農学校の教授を務めていた宮崎道正の指導を受ける。宮崎は予科の英語と本科の化学を受け持っていた。少し先回りして言うと、外三郎はこの宮崎とは後々まで行動をともにすることになる。新聞「日本」に掲載された略歴によれば、外三郎は官費の支給を辞退し、「弊衣粗食」して、自費ですべてをまかかった、ただひとりの卒業生だったという。しかし、『北大百年史』によれば、札幌農学校は明治13年以後は「官費」制を廃止して、「貸費」制を取っており、貸与金は卒業後、月賦で返済する義務があった。外三郎以外にも私費で学んでいる生徒が何人か名前が挙がっている。外三郎は明治18(1885)年7月に卒業、農学士の学位を得た。同年11月28日付で長野県令名で、「青森県士族今外三郎」を長野県中学校の教諭に採用したい旨の照会状が札幌農学校長宛に届いている。したがって、外三郎が長野県に赴任したのは、翌明治19年であつたらう。

ところで外三郎の一年先輩に志賀重昂がいた。明治15年の在籍者名簿(『北大百年史』)を見ると、志賀は明治13年7月に本科に入学している。志賀もまた卒業後、明治17年、長野県中学校に赴任しているので、外三郎は後を追うように、同じ学校に赴任したことになる。ただし、次の引用にもあるとおり、志賀は長野県令と悶着を起こし、明治18年には懲戒免職となっているので、外三郎はおそらく志賀重昂と入れ替わりに赴任したと思われる。以下に引用する志賀にまつわる長野時代のおもしろいエピソードとは少し矛盾するかも知れない。

「ところが或る夜志賀が友達と料亭で飲んで騒いでいると、階下の座敷に県知事木梨精一郎が宴会を催していて、2階が騒がしいから静かにするように女中に言わせた。これを聞くと血気に逸る志賀は「何んだ、知事位の小者が小癪千萬な・・・」と、反って大いに騒ぎ立てた。それがあとで県庁の問題になって志賀はクビになった。この話は志賀が後年自ら述懐したところだが、この場には今もいたらしく、今も長野中学を辞めて上京し、二人は杉浦重剛の校長をしている英語学校の教師となり、今は傍ら宮崎を援けて会計の仕事を引き受けた。外三郎の兄武次郎の直話によれば、料理屋の騒ぎの時、志賀は知事の宴会の座敷に乗り込んで小便を引っかけたのだという。」(『「日本」新聞と「朝日新聞」 自恃居士高橋健三と「二十六世紀」事件』30頁)。

引用に出てくる「宮崎」は札幌農学校で教えを受けた宮崎道正である。宮崎は大学南校以来の親友であった杉浦重剛らと、明治 18(1885)年7月、神田錦町に進学予備校、東京英語学校を設立した。この私立の予備校は帝国大学予科(後の第一高等学校)への進学者数はトップを誇っていたが、外三郎はこの学校の会計事務も担当していたことになる。松本には2年ほど教鞭をとっていたと資料にあるから、東京英語学校教師となったのはおそらく明治 21 年だろう。以後死に至るまでここで教授した。ちなみに、このときの生徒のひとりに、長谷川如是閑がいる。如是閑は明治 36 年、活動後期の日本新聞社に入社し、憧れの羯南のもとで働くことになるわけだが、明治 39 年、経営困難はいかんともしがたく、新聞「日本」は売却せざるを得なかった。スタッフはそのまま残留したが、新しい社長の経営方針が最初の約束と違ってきたのに憤慨した多くの社員は、同年末、趣意書を発表して大挙、新聞「日本」を去った。如是閑もそのひとりで、一時、「政教社」に身を置いた。新聞「日本」のメンバー七名と合流した「政教社」は雑誌「日本人」を「日本及日本人」と改題する。その後、明治 41 年、如是閑は「大阪朝日新聞」に入社、デモクラシー運動をリードし、戦後はイギリス流のリベラリズムの普及に努めた。その如是閑が東京英語学校時代を回顧しているので引用しておこう。

「英語学校といふのは中学程度の学校だったが、その教員は杉浦先生の人格を中心として集まった人々で、今の大学教授相当の、さうして人物の点でもっと徹底して、もっと大きいやうな人達だった。{中略}それが又大抵日本新聞に関係があるか、何れにしても『日本』系の人物だったのである。校長の杉浦先生は無論の

事、志賀重昂、今外三郎、 — 此先生は夭折されたが、若い、落ついた無口の先生で、私は虫のせいかな頗る此先生がすきだった — {中略}というやうな立派な学者でもあり堂々たる人格者でもあるといふ人達が何れも多少日本新聞と縁故のある人々だったやうに私達は心得てゐた。」「(日本新聞と「陸さん」の印象」「日本及日本人」大正十二年九月一日第八六九号)

長谷川如是閑は今外三郎に対して引用に見られるごとく、ことさら好感を持っていたようである。これは何も如是閑だけではなかった。長野県中学校時代の教え子たちにも慕われていた。面倒見もよかったので、上京すれば必ず外三郎を訪ねて行く卒業生が多かった。そして臨終の枕辺で看護にいそしんだのも多く長野時代の教え子だったという。

再び最初の引用に戻ると、兄の武次郎の名が見えるので、少し紹介しておこう。武次郎は父貞衡の次男として、万延元(1860)年弘前に生まれた。函館師範学校を中退後、司法官試験に合格し、札幌、仙台、福岡など各地の裁判所で判事を務めた後、官を辞し、東京に戻った。東京では外三郎の関係で杉浦重剛などと往き来するようになる。明治 25(1892)年3月、弟外三郎が「東京朝日新聞」在社中に死去したので、杉浦重剛の推薦で、弟の「身替り」として「東京朝日」に入社、外務省を担当した。寒水学人あるいは黙々庵と号し、昭和 18(1943)年東京で死去している。83歳であった。ちなみに武次郎を推薦した杉浦重剛自身も、明治 25年5月「東京朝日新聞」に客員として入社し、論説を主宰するようになった。「東京朝日新聞」はいよいよ国粹主義的色彩を濃くしていくことになる。一方「大阪朝日」には、明治 26年1月、内閣官報局長を辞めた高橋健三が客員として入社し、条約励行論を展開、紙面を一新した。朝日新聞はこのように「日本」系列の人材を登用し変貌していった。

さて今外三郎は東京英語学校の教師を務めながら、その短い生涯、さまざまな活動を展開していく。まず先輩の志賀重昂や哲学館(後の東洋大学)からの三宅雪嶺らと一緒に、明治 21(1898)年4月3日、「政教社」を結成して、雑誌「日本人」を創刊する。今外三郎は創刊号に4頁にわたって「日本殖産策」を掲載した。一方、「政教社」設立の直後の4月9日、内閣官報局編輯課長を辞していた羯南は「東京電報」を創刊している。これを支援したのは、杉浦重剛、小村寿太郎、高橋健

三、宮崎道正、福富孝季ら 18 名で前年の4月に結成した「乾坤社同盟」であった。いずれも時の政府の欧化主義政策に反対し、日本古来の伝統文化尊重の国粹保存主義、ならびに自由、平等を標榜する思想団体である。しかし「東京電報」は創刊後一年も満たずして経営が行き詰まった。羯南は元上司でもあった高橋健三に相談をもちかける。高橋はこのときまだ内閣官報局の次長を務めていた。外務省にいた小村寿太郎もそうだが、政府の高官でありながら、公然と政府を攻撃する立場を貫くことのできた時代、それが明治という時代だった。そこで、杉浦重剛、福富孝季、宮崎道正らと相談した結果、「東京電報」を改革、延命するのではなく、新しく新聞を創刊することでまとまった。それが明治 22(1889)年2月 11 日、大日本帝国憲法発布の当日に創刊した新聞「日本」である。最終的には谷干城將軍の邸で決定を見たのであるが、新聞「日本」の最大のパトロンであったこの谷將軍に、新聞の必要性を説得するにあたっては、將軍と同郷(高知県)の福富孝季(臨淵)の働きかけが大きかった。だから羯南は臨淵に対して並々ならぬ思いを抱いていたようである。臨淵が明治 24 年4月、35 歳で自死したとき、「臨淵言行録」(明治 25 年3月)を発刊するにあたって羯南は自ら編輯兼発行人になっている。羯南はその「叙言」を執筆し、「日本」創刊の恩人であった臨淵の人となりを称え、感謝の念を表明した。

それはさておき、当然の成り行きとして、新聞「日本」の創刊時、「乾坤社」の杉浦重剛、高橋健三、宮崎道正、福富孝季らが日本新聞社の相談役に名を連ねた。そして杉浦が社長代理を務める。そして今外三郎も宮崎との関係から日本新聞社の庶務会計の部長に就任した。やがて、羯南ら実務担当者と杉浦らの相談役との間に考え方の齟齬が生じ、明治 23 年3月には、杉浦や宮崎をはじめとする彼ら相談役は新聞「日本」から手を引き、後は羯南に任せる格好となった。羯南と同郷の、今外三郎はほとんど困った状況になったわけだが、外三郎は恩師である宮崎道正と行をともにしたのである。しかし「非欧化主義」という基本的な考え方は一致していたので、さまざまな局面で彼らは協力し合って、政府の欧化主義政策や条約改正の動きに対して反対運動を展開していく。

時間的に少し遡るが、今外三郎の話題をもう一つ述べておこう。明治 22 年6月頃、大隈重信の条約改正案反対運動の中核を担った「日本倶楽部」が結成された。これは杉浦重剛、宮崎道正、福富孝季らが発起し、三浦梧楼、谷干城、浅野

長勲らが資金を出して、牛込に設置した非政社団体に、この面子からも窺われるが、高橋や羯南、雪嶺、等の新聞「日本」や雑誌「日本人」系列の人達に、玄洋社の頭山満、また池辺三山(明治 29 年羯南の斡旋で「大阪朝日新聞」に主筆として入社、翌年、「東京朝日新聞」兼務となり上京、明治 40 年、夏目漱石を社員として招聘した)らも参加した。この「日本倶楽部」の幹事を務めたのが今外三郎であった。同年 8 月 15 日、「日本倶楽部」を中心として、5 団体と新聞社 8 社が「改正条約反対同盟」を結成した。その演説会で、今外三郎は池辺三山らとともに登壇し、演説をぶったという。また同年 10 月 15 日の谷干城の日記によれば、今外三郎が谷邸に伺い、政府の会議の様子を伝えている。条約改正を強行したい黒田首相、大隈外相に対して、後藤象二郎や山縣有朋の各大臣が反対に回り、閣内は分裂の様相を呈していると報告し、外三郎は翌日の新聞「日本」に、「停止の覚悟にて、十分書く積りなり」と言ったという。(実のところ「日本」は 10 月 19 日に 1 週間の発行停止にあっている。) 10 月 18 日、大隈重信は玄洋社の来島恒喜に襲撃され爆弾によって片脚を失う。来島はその場で自決。これを契機に、黒田内閣は条約改正交渉中止に追い込まれ瓦解した。

新聞「日本」を離れた今は、明治 24(1891)年 1 月から「東京朝日新聞」の姉妹紙「国会」新聞に社友として経済論説を寄稿している。「国会」は前年の 11 月、「東京朝日新聞」の姉妹紙であった「東京公論」と末広鉄腸の「大同新聞」が合併して誕生した新聞で、「東洋のタイムス」になることを理想として掲げ、不偏不党の政治新聞を目指した。まさに新聞「日本」と同じ思想的背景を持っていた。主筆は末広鉄腸だが、客員として、志賀重昂や三宅雪嶺の名が見える。今外三郎がこれに関わるのも自然の成り行きだろう。そして明治 24 年 5 月、今は論説記者として、「東京朝日新聞」に入社するのである。それまで何かと通俗的な「小新聞」とみなされていた「東京朝日新聞」は、政論を主とするまっとうな新聞に脱皮することを望んでいた。今外三郎はこれに応えるべく入社したのであった。しかし残念な事に、入社した年の年末、喀血して入院、大磯に転地療養中の翌明治 25 年 3 月 27 日に死去した。法名は「恭心院義行夢卜居士」、本郷駒込の吉祥寺での葬儀は、寒風の吹き荒ぶなか、高橋健三、杉浦重剛、恩師の宮崎道正ほか数百名が参列して挙行された。26 歳 7 ヶ月の生涯であった。

著書に『学海之針路』(夢ト居士の筆名、明治 20 年 7 月 慶林堂)、訳書に『農場整備論』(明治 20 年 8 月 汲古堂)、『電気現象及理論』(ジョン・チンダル著、明治 20 年 8 月)、哲学館における講義録に『地文学』(明治 27 年)、校閲本に『敬業社編 万国小地理書』(明治 21 年 11 月 敬業社)がある。ついでに挙げておくと、徳野嘉七『日本酒改良實業問答』甲乙二巻(明治 32 年 12 月 帰一社)に序文(日付は明治 22 年 7 月)を寄せている。最後に、論説や評論を寄稿した新聞、雑誌を時系列で整理しておく。「日本人」、新聞「日本」、「国会」新聞、「東京朝日新聞」、「亜細亜」(「日本人」がたびたび発行停止を食らったので、明治 24 年 6 月に改題して刊行した雑誌)となる。そのなかで、「日本人」には論説 36 本、夢ト居士の名前で評論 2 本、「亜細亜」には論説 11 本を寄稿した。「亜細亜」26 号(明治 24 年 12 月 21 日)に載せた「経済社会の紛乱及び其原因」が最後の論説であった。

3、資料紹介

○ダブルユーバルネッス、チエーシーモルトン及ジームーレー氏合著

今外三郎訳 『農場整備論』

図書・汲古堂

1887(明治 20)年 8 月

原著は明治 17 年にイギリスで刊行された農機具や農場整備に関わる農家必携の書物である。しかしここで紹介したいのはこの訳本というよりも訳者、今外三郎の人物についてである。陸羯南の日本新聞社に勤めていた青森県出身者の一人であるが、調査不足のため昨年度の特別展「陸羯南と正岡子規」では取り上げることができなかった。

今外三郎(こん・そとさぶろう 1865-92)は弘前藩士の子に生まれ、明治 18(1885)年に札幌農学校を卒業した。1年先輩の志賀重昂(しが・しげたか)は親友で、志賀は卒業後明治 17 年に長野県中学校の教師として、松本に赴任した。その後今外三郎も同じ中学校の教師となった。しかし2年ほどで職を辞し、明治 20(1887)年頃上京、両人とも杉浦重剛(すぎうら・じゅうごう)の東京英語学校の講師となる。長谷川如是閑(はせがわ・によぜかん)は当時この英語学校の生徒であり、今のことを「此先生は夭折されたが、若い、落ついた無口の先生で、私は虫

のせいか頗る此先生がすきだった」と『日本新聞と「陸さん」の印象』（「日本及日本人」大正 12 年 9 月 1 日号所収）の中で回想している。明治 21（1888）年、今は三宅雪嶺（みやけ・せつれい）、志賀重昂らと政教社を設立し雑誌「日本人」を創刊、政府の極端な欧化主義政策に反対し、日本の伝統文化を守り、自由、平等の価値を擁護する言論活動を展開していく。今は創刊号に「日本殖産策」を 4 頁にわたって掲載した。また翌明治 22（1889）年、日本新聞社創立時には札幌農学校の恩師であった宮崎道正のもとで日本新聞社の会計を担当したが、1 年余で宮崎や社長代理を務めていた杉浦重剛とともに「日本」を離れた。また大隈外相の条約改正に対する反対運動の牙城である日本倶楽部（杉浦重剛、福富孝季（ふくとみ・たかすえ）らが発起して、谷干城（たに・たてき）、浅野長勳（あさの・ながこと）らが資金提供し明治 22 年 6 月頃設立）の幹事を努め、反対運動の演説会には池辺三山らとともに登壇し世論の喚起を促した。明治 24（1891）年、今は論説記者として東京朝日新聞社に入社し将来を嘱望されたが、翌年、肺結核のため 26 歳という若さで亡くなった。

このように政教社の中心メンバーとして雑誌「日本人」やその後継誌「亜細亜」の論客として活躍した今外三郎についてはもっと調査する必要がある。また未見だが、「日本酒改良實業問答」（明治 22 年）に序文を寄せている。

（館長・黒岩恭介）

（平成 20 年 04 月 03 日付・毎日新聞「今週のお宝」掲載）